ひょうご水百景

No.47　太多田川（西宮市塩瀬町生瀬・山口町船坂）

～座頭谷川砂防堰堤群と奇勝「蓬莱峡」～

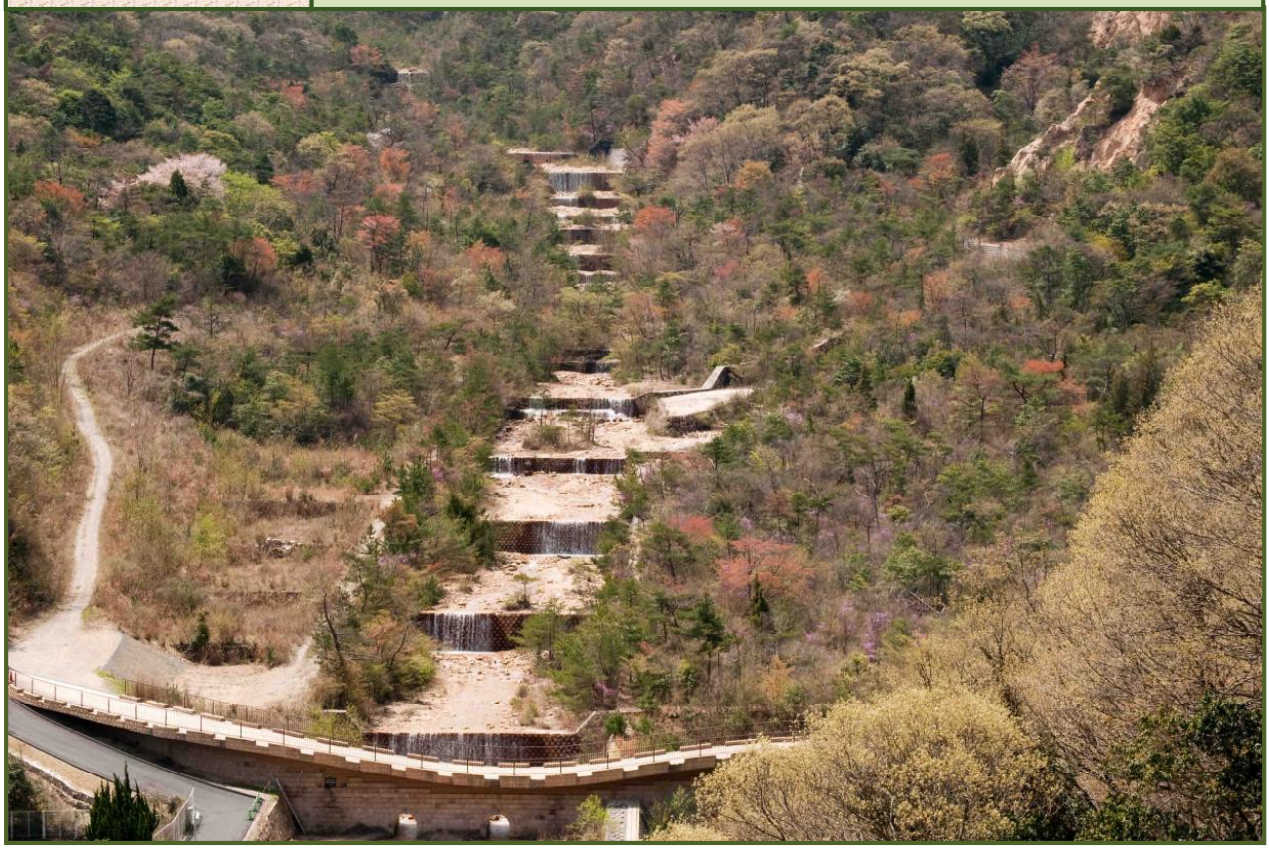

写真-1 主要地方道 51 号宝塚唐櫃線の七曲りから座頭谷を撮影（平成 22 年 4 月）

■ 武庫川の治水～源流から流出する土砂を止める

上の写真は、主要地方道 51 号宝塚唐櫃線の七曲りから座頭谷（ざとうだに）を撮影したもので、荒廃した谷からの土砂流出を抑えるため、砂防堰堤が連続して設置されています。手前の砂防堰堤（蓬莱峡堰堤）が最も新しく、平成 14（2002）年に竣工しています。4 月なのでコバノミツバツツジの淡いピンク色の花が咲いているのが見えます。

武庫川の右支川である逆瀬川や太多田川（おたたがわ）※1 の上流域は、それぞれ「千石ズリ」や「百間ズリ」と呼ばれる大崩壊地を有し、大雨が降るたびに大量の土砂を本川である武庫川に押し流していました。そのために武庫川下流部では河床が上昇し、洪水による氾濫が繰り返されてきました。

写真-2 昭和 11 年頃の座頭谷川（「兵庫の砂防」ﾊﾟﾝﾌﾚｯﾄから引用）

そこで武庫川の治水対策の一環として、土砂流出の著しい逆瀬川や太多田川において、明治 32（1899）年から山腹工や堰堤工を主体とした砂防工事が始まりました。

このことから、両川は兵庫県の近代砂防発祥の地とされています。中でも太多田川の左支川である座頭谷川に設置された 100 基あまりの砂防堰堤群（写真-1）の眺望は壮観で、これらの砂防施設の整備効果もあって、昭和 13（1938）年の阪神大水害では武庫川は表六甲河川のような壊滅的な被害を免れることができました。

これらの砂防施設には、目地に直接落水が当たらないように保護する「鎧（よろい）積み」という技法を用いた鎧積堰堤（昭和初期の施工）をはじめとして、現地採取の巨石を積み上げた自然石積堰堤（大正初期の施工）や練石積堰堤などさまざまなタイプの堰堤があり、逆瀬川と同様、後世に伝えていきたい砂防技術の宝庫となっています。

写真-3 鎧積堰堤

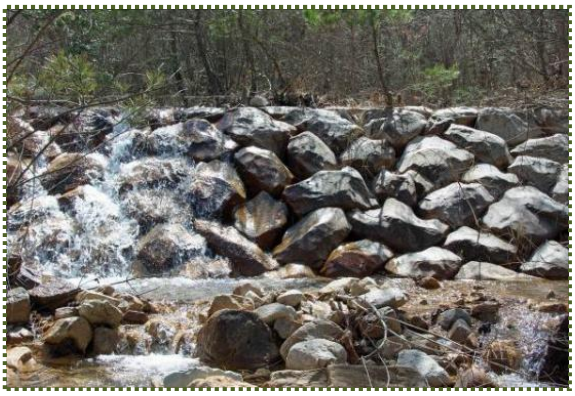

写真-4 自然石積堰堤

※1 太多田川：「おおただがわ」や「おただがわ」などいろんな読み方があり、座頭谷に設置されている「兵庫県砂防発祥の地」の案内板や国道 176 号の太多田橋三叉路の表示板には「おたたがわ」と記されている。正しくは「おたたがわ」である。

■ 大規模な断層破砕帯の影響で荒廃著しい太多田川の上流域

太多田川は六甲山系東部に位置する武庫川の右支川で、有馬-高槻構造線※2 の一部を占める六甲断層の大破砕帯に沿って流れています。この構造線は、神戸市北区の有馬温泉西方から高槻市街地北部に至る長さ約 55ｋｍの断層帯で、確実度Ⅰ※3、活動度※4 はＢ級（0.1～1 ㎜／年）、最近のトレンチ調査により文禄 5（1596）年に発生した慶長伏見地震の震源断層であった可能性が指摘されています。

構造線の北側は中生代白亜紀※5 後期に形成された有馬層群の流紋岩、南側は白亜紀末に貫入してきた六甲花崗岩で、周辺の地質状況を観察すると、花崗岩地帯には大規模な断層破砕帯が見られ、破砕された花崗岩は風化・侵食がかなり進んでいますが、有馬層群の方は岩盤が堅固で破砕されている状況はほとんど見られません。

太多田川の上流域には、花崗岩を覆って大阪層群に属する高位段丘の未固結砂礫層があり、侵食により未固結砂礫層や破砕花崗岩が削られて西部劇に見られるような悪地地形（バッドランド）が見られます。これが奇勝「蓬莱峡」です。

※2 構造線：（Tectonic Line）地層群同士または地塊同士の境界、つまり地体構造の境界線を指す地質学の用語。地層の不連続部分である断層の一種で、活動していないものも多数存在するので活断層とは限らない。

※3 確実度Ⅰ：活断層であることが確実なもの。断層の位置、変位の向き共に明確なものをいう。

※4 活動度：活断層の過去における活動の程度。

※5 白亜紀：地球の地質時代の一つで、約 1 億 4500 万年前から 6600 万年前を指す。

図-1 太多田川流域の地質

■ 既設堰堤の保全に配慮～大暗渠堰堤「蓬莱峡堰堤」

平成 7（1995）年 1 月 17 日に起きた兵庫県南部地震（M=7.3）により表六甲では 1,700 ヶ所にのぼる山腹崩壊が確認されました。太多田川上流域においても多数の新たな斜面崩壊が発生したことから、新たな土砂災害対策として座頭谷川と太多田川から流下する土砂を捕捉するため、両川の合流点付近を遊砂地として位置づけ、通常砂防事業により砂防堰堤を建設することとなりました。

写真-5 蓬莱峡堰堤

新設の砂防堰堤「蓬莱峡堰堤」は、既設の歴史的な砂防堰堤群を保全しつつ、上流の不安定土砂対策を行う必要があったことから、透過型の大暗渠堰堤としています。下流河道の安定に必要な平常時および中小洪水における無害な土砂を流し、大量の土砂を含む大規模洪水に対しては、ダムの堰上げ効果で土砂の流出を抑制して、下流河道の安全を確保するものです。

写真-6 下流から蓬莱峡堰堤を撮影

堰堤軸は、太多田川と座頭谷川の二つの流心に対して直角にするとともに滑らかな曲線軸としたため、上から見るとＳ字型堰堤になっています。また、異常堆積時の土砂撤去などに堰堤天端を管理用通路として利用できるようになっていて、ハイカーからは「曲がり橋」とか「万里の長城」などと呼ばれています。

平成 10（1998）、11（1999）年度に、合流点付近の複雑な土砂移動現象に対して、最適な砂防施設の配置と基本形状を立案するために水理模型実験を行っています。工事は、平成 12（2000）年度に着手し、平成 14（2002）年 10 月に竣工しました。（H=11.50m、L=152.50m）

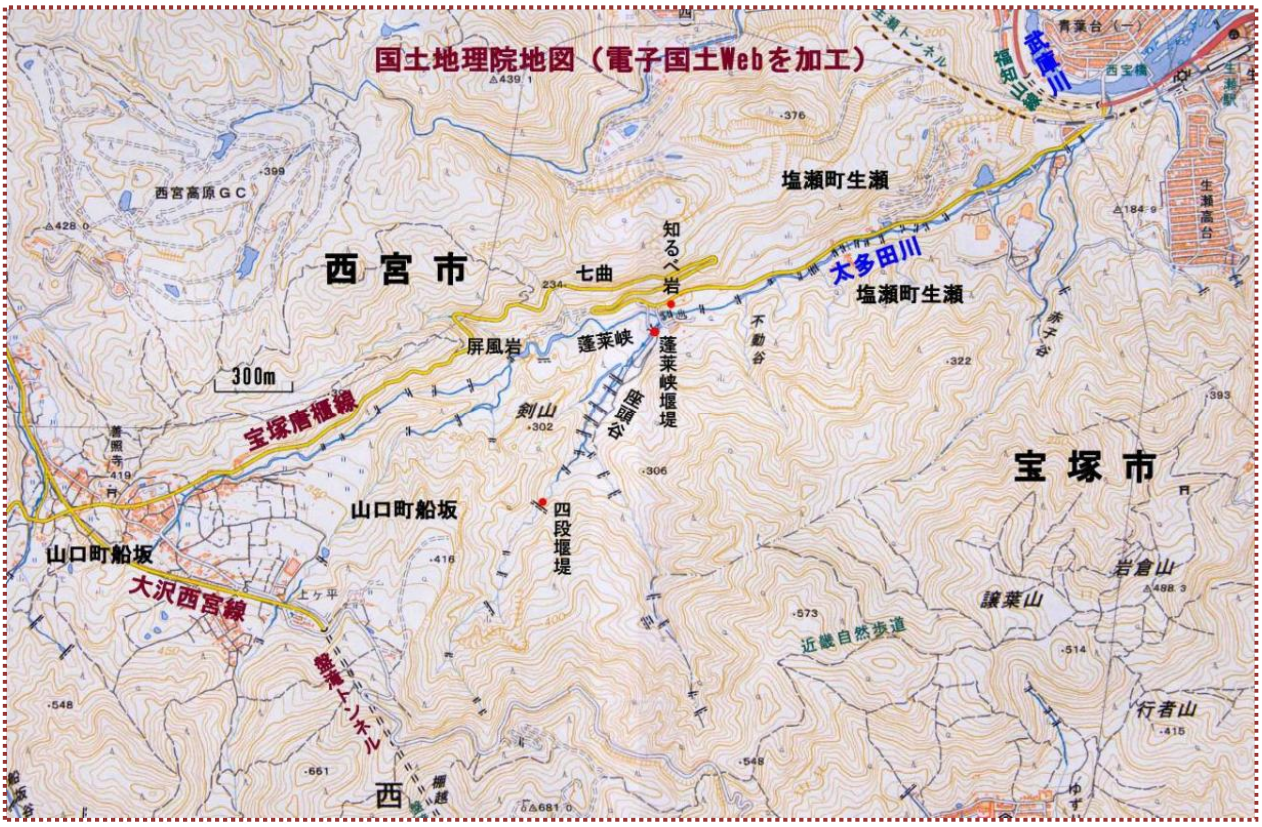

図-2 太多田川流域図

■ 座頭谷の四段堰堤

座頭谷川の上流部にある四段堰堤。最下段の堰堤は、裏込コンクリートが見えるので練石積み。２段目、３段目は鎧積みですが、同じ鎧積みでも、３段目は２段目よりも積み方がうまくなっています。最上段の４段目はコンクリート堰堤となっています。

上に行くほど新しく、１段目、２段目は一部が崩れかけています。３段目の鎧積堰堤はかなりしっかりしています。４段目の堰堤は右岸袖部に銘板が埋め込まれていて、「緊急砂防工事 座頭谷堰堤」、「竣工 平成８年９月、H=11.00m、L=71.50m」云々と書かれています。写真-11 は、四段目の堰堤上から上流を撮影したものですが、堆砂敷が砂礫で埋め尽くされて満砂状態です。

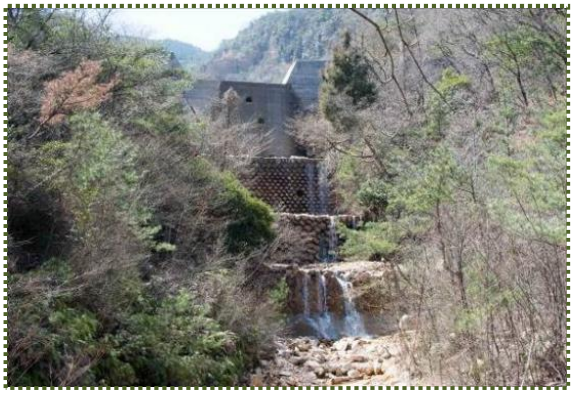

写真-10 四段堰堤

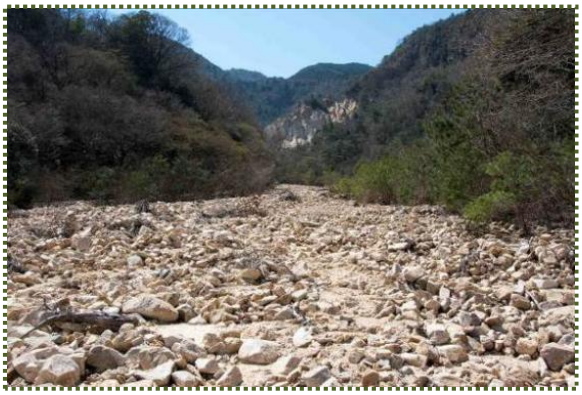

写真-11 四段目・座頭谷堰堤の堆砂状況（満砂）

写真-12 崩れかけの１段目堰堤

写真-13 まだ大丈夫です！２段目鎧積堰堤

写真-14 しっかりしている３段目鎧積堰堤

■ 座頭谷の謂われと太閤の「知るべ岩」

生瀬で三田街道（現・国道 176 号）と分かれ、琴鳴山の南を太多田川に沿って西に向かうのが有馬街道（現・主要地方道 51 号宝塚唐櫃線）です。昔この道は、街道と言っても川の瀬づたい道で、有馬入湯者や旅人は、その流れを右に左に跳び交いながら往来していたそうです。そのため、この道を「四十八ヶ瀬」とか、「四十八跳び」などと称し、瀬づたいに跳びかう時滑ったり転んだりしたので、この川のことを「うたたび（転び）川」と呼んでいて、これが転訛して太多田川になったと言われています。

筆者も、この谷は何度か歩いたことがあります。礫がゴロゴロしているので、足元を見ず周りの景色に気をとられているとバランスを崩して思わず「おっとっと！」、これが転訛して「おたたがわ」になったというのが筆者の説です。

この付近が有馬街道最大の難所で、ここを過ぎると正面に花崗岩が風化した奇峰が群立する「蓬莱峡」があり、左の谷が「座頭谷」です。

江戸時代の名所案内記などによると、昔、京に住む一人の座頭が、目の治療に良いと言われた有馬温泉に入湯しようと、苦労して四十八ヶ瀬を通ってやってきました。ところが、ここから右に道をとって船坂へ行くのを、誤って左の谷に迷い込み、盲目の悲しさでついに出ることができず、飢えと寒さのためこの谷で亡くなってしまいます。

それ以来、付近の人たちは座頭の霊を慰める意味を込めて「座頭谷」と呼ぶようになったとか。

この谷の入口付近、「知るべ岩」バス停から西に 20m ほど行ったところの県道下の斜面に「知るべ岩」といわれる巨岩があります。その巨岩上に「知るべ岩」の謂われが刻まれた石碑があり、「往時、豊太閤有馬入湯の際、此処に於て旅人屡々（しばしば）迷ふを聞き、此岩に右ありま道と刻して道しるべとせりと。以来人称へて志るべ岩と云ふ」と記されています。（字が不鮮明ですが、概ねこのような文です。）

そして、巨岩の東の面には秀吉の揮毫といわれる「右ありま道」の文字が刻まれているのが読み取れます。

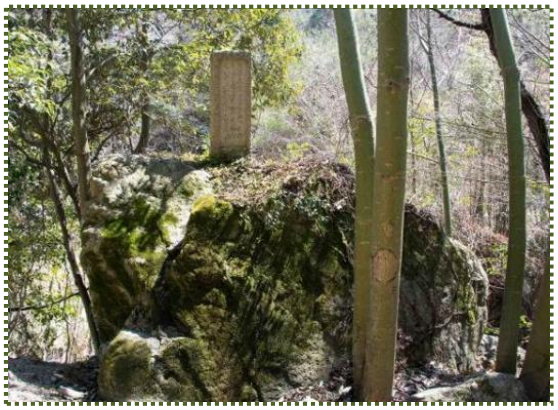

写真-7 「知るべ岩」とその上に立つ石碑

写真-8 「右ありま道」の文字

写真-9 「知るべ岩」石碑

■ 激しい風化侵食により形成された奇勝・蓬莱峡

「蓬莱峡」という名は、船坂出身の坂田勝蔵（元・山口村長：T13～S3）が青年時代、朝鮮に遊んだ時、絶景・蓬莱山（別名金剛山）の景観によく似ていることから「蓬莱峡」と名づけたといわれています。それまでは、宝永 8（1711）年の貝原益軒「有馬山温泉記」にも記されているとおり、剣岩とか、大剣（おおつるぎ）・小剣（こつるぎ）と呼ばれていたそうです。

百万年前の六甲変動により破砕された花崗岩地帯で、断層に沿う急崖は激しい風化・侵食によって奇観を呈し、鋸歯状の鋭い岩塔群が屹立（きつりつ）する荒涼とした風景が展開します。

岩塔群の成因は花崗岩の方状節理※6 の疎密によるもので、密な部分は風化が深部まで進んでマサ化し、疎な部分は風化しにくく岩として残るためにこのような奇観ができるそうです。

※6 **方状節理**：岩体が直方体状になった節理。花崗岩のような深成岩によく見られる。

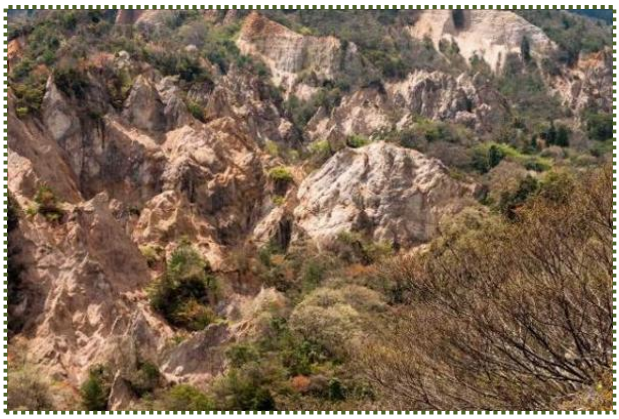

写真-12 七曲りから蓬莱峡を望む

■ 『隠し砦の三悪人』のロケ地となった蓬莱峡

「蓬莱峡」は、昭和 33（1958）年に公開された黒澤明監督の『隠し砦の三悪人』のロケ地になった所としても有名です。

この映画は、戦国時代、隣国・山名藩との戦に敗れた秋月藩の侍大将が、世継ぎである姫君と共にお家再興の資金とする金の延べ棒を隠し持って友好関係にある早川藩に逃げ込むまでの脱出劇を描いたものです。

敗れた秋月家の侍大将・真壁六郎太（三船敏郎）は、世継ぎである雪姫（上原美佐）を擁して、お家再興のための資金とする黄金と共に隠し砦に籠ります。この「隠し砦」の舞台となった場所こそが、大小の岩塔が屹立する奇勝・蓬莱峡です。草木も寄せつけないむき出しの地肌が広がる風景は、まさに「隠し砦」のイメージにぴったりです。

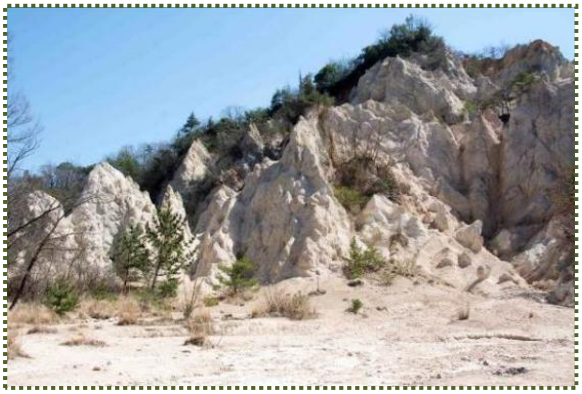

写真-13 蓬莱峡広場

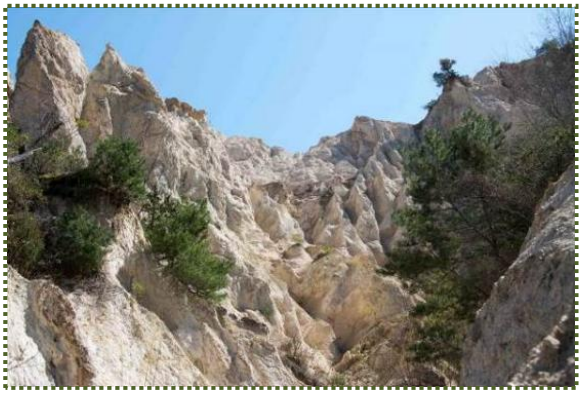

写真-14 岩塔群が屹立する蓬莱峡

■ モノローグ

４ 月の桜の開花時期になると、座頭谷堰堤群の両脇には、コバノミツバツツジの淡いピンクの花が咲き、荒涼とした風景を少しだけ華やかにしてくれます。このツツジはアカマツ林などの明るい二次林に見られるごく普通の種で、競争相手の少ない禿げ山などの痩せ地に定着し、時間をかけてゆっくりと生長します。

名前の意味は「小葉の三つ葉つつじ」で、茎端から３枚の葉を出すミツバツツジにはたくさんの種類がありますが、そのなかでも小さな葉を持つことが名前の由来になっているそうです。

西宮市の象徴・甲山の南々東約 2.5km にある廣田神社の外苑には、コバノミツバツツジが大きな群落を形成（写真-16）し、総株数は約２万株にのぼるとか。

昭和 44(1969)年兵庫県の天然記念物に指定されていますが、この神社は、毎年３月に阪神タイガースの必勝祈願祭が執り行われることでも有名です。

今年（平成 27 年）も３月 24 日に必勝祈願祭が行われました。さてご利益のほどは……。

写真-15 廣田神社本殿

写真-16 座頭谷のコバノミツバツツジ

写真-17 廣田神社のコバノミツバツツジ群落

【参考資料】

1 『兵庫の地質』兵庫県土木地質図編纂委員会　平成８年３月

2 『山口村誌』 山口村誌編纂委員会　昭和 48 年３月

3 『隠し砦の三悪人、コバノミツバツツジ』 フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia)』

※発刊：平成 27（2015）年４月 『ひょうご水百景』No.47

改訂：令和　８（2026）年４月 『ひょうご水百景』No.47